

Etsuko Terada & Kikuo Watanabe Duo Piano Concert

寺田悦子&渡邊規久雄 デュオ・ピアノ・コンサート

《四手連弾の宇宙 IV～連弾音楽の系譜》

宗次エンジェル基金／日本演奏連盟正会員のための公演活動支援事業

2024年11月7日(木) 19:00開演

盛岡市民文化ホール 小ホール

7:00p.m., Thursday, November 7, 2024 at Morioka Civic Cultural Hall

【主催】M企画

【後援】公益社団法人日本演奏連盟、IBC岩手放送、岩手日報社、国際ピアノデュオ協会
公益財団法人日本ピアノ教育連盟、岩手県ピアノ音楽協会、武蔵野音楽大学同窓会岩手県支部
株式会社ベヒシュタイン・ジャパン、株式会社河合楽器製作所、株式会社東山堂

2024年11月21日(木) 19:00開演

紀尾井ホール

7:00p.m., Thursday, November 21, 2024 at Kioi Hall

【主催】ジャパン・アーツ

【後援】国際ピアノデュオ協会、公益財団法人日本ピアノ教育連盟、日本シヨパン協会
公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団



寺田 悦子 *Etsuko Terada, piano*

16歳でウィーンに留学。在学中に東京でオールショパン・プログラムでデビュー・リサイタルを開いた寺田悦子は、ウィーン音楽大学を最優秀賞で卒業後に渡米。ジュリアード音楽院大学院、インディアナ大学等で研鑽中の1977年、ルービンシュタイン自身が審査した第2回ルービンシュタイン国際ピアノ・コンクール第3位受賞で注目を集め、翌1978年第6回リーズ国際ピアノ・コンクール入賞、日本ショパン協会賞、飛騨古川音楽賞などを受賞。東京・名古屋・大阪など国内各地でのリサイタルやN響をはじめとする日本の主要オーケストラとの共演はもちろん、「プラハの春」などの国際音楽祭出演、イスラエル・フィル、ヘルシンキ・フィル、ドレスデン・フィル、北BBC響等数多くの海外オーケストラとの共演、英国、ドイツ、フィンランド、ロシア、ラトヴィア、アメリカ、メキシコ、パナマ、ペルーでのソロ・リサイタル、ニューヨークのカーネギーホールでの演奏等、国際的に活躍してきました。日本音楽コンクール、東京音楽コンクール、全日本学生音楽コンクール全国大会、ビティナ全国大会等数多くのコンクール審査員、ドイツやオーストリアで演奏とマスタークラスを行うなど後進の指導にも積極的です。CDにショパン作品集「ノアンI」「ノアンII」、渡邊規久雄とのデュオ「春の祭典&ラフマニノフ」、シューベルトの連弾作品集「シューベルト奇跡の1828年」他多数。

渡邊 規久雄 *Kikuo Watanabe, piano*

北欧、特にフィンランド音楽に造詣が深く、中でもシベリウスを生涯のライフワークとして演奏活動の中心に据えている渡邊規久雄。2003年から2023年まで6回にわたったシベリウスのピアノ音楽全曲シリーズがすべてCD化され、シベリウス生誕150年記念の2015年にはNHK-BSプレミアムのクラシック倶楽部『シベリウスの室内楽の世界』に出演、東京と大阪で行ったオール・シベリウス・プログラムでのリサイタルはNHK-FMで放送されるなど、シベリウス・ピアノ音楽の第一人者として活躍してきた長年の功績は、2015年12月にフィンランド・シベリウス協会から歴史と伝統ある《シベリウスメダル》が授与されるという栄誉に結実しました。1974年インディアナ大学を成績優秀賞で卒業、1976年同大学院を修了。1976年7月のデビュー・リサイタル以降、ショパンのポロネーズ全曲、シューベルトの最後の3曲のソナタなどによるリサイタル、ラトヴィアの首都リガやヘルシンキ、東京、大阪、名古屋等での寺田悦子とのデュオ・リサイタル、国内はもとよりサンクトペテルブルグ、モスクワ、ハバロフスクなどでのオーケストラとの共演など精力的に演奏活動を行っています。CDは「シベリウス・リサイタル」の他に寺田悦子とのデュオや佐藤まどかとのシベリウス・ヴァイオリン作品集など。武蔵野音楽大学ピアノ科特任教授、大阪ザ・フェニックスホール音楽アドバイザー。

透明感のある音色と豊かな情感で聴衆を魅了し続ける寺田悦子と、シベリウスをライフワークとして演奏活動の中心に据える渡邊規久雄。ソリストとして活躍する二人によるデュオは、2台ピアノや連弾のオリジナル作品、いろいろなスタイルからの編曲作品、2台ピアノのための協奏曲まで、カラフルでエキサイティングな世界の醍醐味を余さず伝えます。これまでベートーヴェン、メンデルスゾーン、シューマン、シューベルトを取り上げてきた《四手連弾の宇宙》シリーズは、今回いよいよモーツァルトとブラームスを演奏します。

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

四手のためのソナタ ニ長調K.381(1772) 【11分】

Piano Sonata for 4 Hands in D Major K.381 【11min.】

- 第1楽章：ニ長調 4/4拍子 1 Move.:in D Major / Allegro
- 第2楽章：ト長調 3/4拍子 2 Move.:in G Major / Andante
- 第3楽章：ニ長調 2/4拍子 3 Move.:in D Major / Allegro molto

フランツ・ペーター・シューベルト Franz Peter Schubert (1797-1828)

創作主題による8つの変奏曲 変イ長調D813 Op.35(1824) 【18分】

8 Variations on an original theme for 4 Hands in A flat-Major D 813 Op.35 【18min.】

ヨハネス・ブラームス Johannes Brahms (1833-1897)

ハンガリー舞曲集 WoO.1(第1・2集 1869/第3・4集 1880) 【55分】

21 Hungarian Dances for 4 Hands WoO.1 【55min.】

<第1集：15分/Book 1：15min.>

- | | |
|-------------|--|
| 第1集：第1番 卜短調 | Book1: No. 1 in g minor; Allegro molto |
| 第2番 ニ短調 | No. 2 in d minor; Allegro non assai |
| 第3番 ヘ長調 | No. 3 in F Major; Allegretto |
| 第4番 ヘ短調 | No. 4 in f minor; Poco sostenuto |
| 第5番 嬰ヘ短調 | No. 5 in f sharp minor; Allegro |

* * *

<第2~4集：40分/Books 2~4：40min.>

- | | |
|---------------|---|
| 第2集：第6番 変ニ長調 | Book2: No. 6 in D flat Major; Vivace |
| 第7番 イ長調 | No. 7 in A Major; Allegretto |
| 第8番 イ短調 | No. 8 in a minor; Presto |
| 第9番 ホ短調 | No. 9 in e minor; Allegro non troppo |
| 第10番 ホ長調 | No.10 in E Major; Presto |
| 第3集：第11番 ニ短調 | Book3: No.11 in d minor; Poco andante |
| 第12番 ニ短調 | No.12 in d minor; Presto |
| 第13番 ニ長調 | No.13 in D Major; Andantino grazioso |
| 第14番 ニ短調 | No.14 in d minor; Un poco andante |
| 第15番 変ロ長調 | No.15 in B flat Major; Allegretto grazioso |
| 第16番 ヘ短調一ヘ長調 | No.16 in f minor; Con moto - in F Major; Presto |
| 第4集：第17番 嬰ヘ短調 | Book4: No.17 in f sharp minor; Andantino |
| 第18番 ニ長調 | No.18 in D Major; Molto vivace |
| 第19番 ロ短調 | No.19 in b minor; Allegretto |
| 第20番 ホ短調 | No.20 in e minor; Poco allegretto |
| 第21番 ホ短調一ホ長調 | No.21 in e minor; Vivace - in E Major; Più presto |

長井進之介(音楽ライター/ピアニスト)

モーツァルト
四手のためのソナタ ニ長調 K.381

連弾するヴォルフガングと姉ナンネル。右は父レオポルトで肖像画は母アンナ・マリア(画:ヨハン・ネボムク・デラ・クローチェ 1870頃)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)は3歳のときからチェンバロを弾き始め、5歳のときには最初の作曲を行っている。父レオポルトに連れられ、やはり早熟な姉ナンネルと共にヨーロッパ各地を巡り、その腕前を披露していた。モーツァルトはピアノやオルガンなどの鍵盤楽器のためにすぐれた独奏曲を数多く書いていることはよく知られているが、4手のための連弾曲や2台のピアノのための作品も作曲し、そこでも圧倒的な才能を示している。四手のためのピアノソナタは6曲書いており(このうち1曲は未完)、本日演奏される《四手のためのピアノソナタ ニ長調 K.381 (123a)》は、モーツァルトが16歳の時にザルツブルクでナンネルと共に弾くために作曲したもの。1772年初めに完成したとされている(出版は1783年)。当初は1781年にウィーンで作曲されたと考えられていたが、自筆譜を姉のナンネルが持っていたことと、モーツァルト姉弟が1772年にザルツブルクで弾いたと推定されるようになったことから、時期が改められた。モーツァルトは父との手紙のやりとりのなかで、たびたびこの曲について言及しているが、その際に「2つの四手のためのソナタ」と記されている。そのため、同時期に作られた変ロ長調(K.358)とセットで書かれたと思われる。

モーツァルト研究の第一人者であったアルフレート・アインシュタインによれば、「イタリア風シンフォニアを四手に編曲したものと見るのがよい。もちろんそれは、2、3の管楽器群、トゥッティと伴奏とははっきりわかれているシンフォニアの意味だ」と評されており、のちのモーツァルトのオペラの序曲や交響曲を思わせる。また第1楽章では《フィガロの結婚》で小姓ケルビーノによって歌われるアリア〈恋とはどんなものかしら〉に類似した旋律が聞こえてくる。連弾の源流ともいえる楽曲であり、奏者はユニゾン、もしくは一人が旋律を担当しているときにはもう一人がハーモニーを担当。そしてあるフレーズを交代で演奏して聴き手に印象を残すなど、明快な書法で書かれている。



18世紀のウィーン(画:ベルナルド・ベッロト)

シューベルト
創作主題による8つの変奏曲 変イ長調 D813 Op.35

600曲以上の歌曲を残したことから“歌曲王”と称されているフランツ・ペーター・シューベルト(1797-1828)だが、実際には多くのジャンルで作品を遺しており、ピアノ曲や室内楽、交響曲などにおいても多くの名作がある。4手連弾作品の作曲にも積極的で、このジャンルでは1810年の《幻想曲ト長調(D1)》にはじまり、晩年の1828年に至るまで、ほぼ生涯にわたって創作を行っていた。これは「シューベルティアード」と呼ばれる彼の仲間たちとの関わりが影響していたためである。彼は大切な友人たちに囲まれながら作品を生み出し、それを親密な集まりのなかで演奏していたのだ。

シューベルトの連弾曲の傑作は晩年の1828年に集中しているが、この曲は、その少し前の1824年に書き上げられたものである。シューベルトはオペラ創作も行っていたが成果を挙げることはできなかった。この曲を作曲していた頃も、オペラが“お蔵入り”と意気消沈していた。しかし、どうにか自分を奮い立たせふたたび創作に向かい生まれたこの楽曲は、シューベルト自身が「幸福と平穏を自分の中に見つけられる様になっている」と語っていることから、自信作であることが窺える。

シューベルトは変奏曲を書く際、過去作の旋律を引用することが良くあったが、この曲の主題は完全な書き下ろしの旋律となっている。付点のリズムが印象的なもので、行進曲を思わせる。シューベルトらしい転調の妙も聞こえ、様々な技法を盛り込もうとしていることがすでに窺える。第1変奏はプリモの3連符によるパッセージが曲を支配しており、第2変奏は16分音符による動きがセコンドによって導かれていく。第3変奏は重音の連続や対位法的な技法が盛り込まれており、第4変奏では急速な音型を両パートが掛け合うように演奏されていく。第5変奏では同主短調に転調し、哀愁を帯びた旋律が歌われていく。和声的な変化がそれを美しく彩る。第6変奏は6連符によるパッセージが力強く奏でられ、両パートでやりとりされていき、第7変奏はコラール風の楽曲となる。半音階的な進行や和声の揺らぎによって晩年のシューベルトを思わせる響きが聞こえてくる。第8変奏は付点リズムを基調とした華麗な楽曲。舞踏的な性格に支配されており、転調を繰り返しながら全曲を閉じる。



《シューベルティアード》画:ユリウス・シュミット(1897)

ブラームス ハンガリー舞曲集 WoO.1



エドゥアルド・レメーニ(左)とヨハネス・ブラームス
(1852/53年撮影)

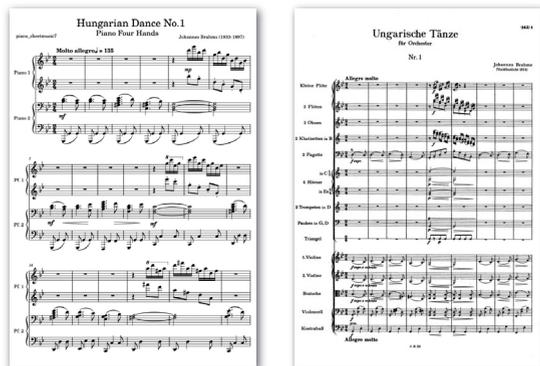
ヨハネス・ブラームス(1833-1897)の音楽はロマン派音楽に属しつつも古典主義的な形式美を尊重しており、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)の後継者とも評されている。ブラームス自身ベートーヴェンを深く尊敬し、楽曲を深く研究し、自身の創作の糧としている。一方で作風としては古典的なものを尊重しつつも、新ウィーン楽派のアルノルト・シェーンベルク(1874-1951)からは革新性が言及されていることから分かる通り、決してただの保守的な作曲家にはとどまっていない。

ブラームスは交響曲に協奏曲、器楽曲に室内楽曲、声楽曲と幅広いジャンルで創作を行い、連弾のための作品も手掛けたが、なかでも《ハンガリー舞曲》は人気の高い作品である。ハンガリーのロマ音楽に基づいて編曲した舞曲集である。オーケストラ版がよく知られているが、もともとピアノ連弾のために書かれ、当時非常に人気を

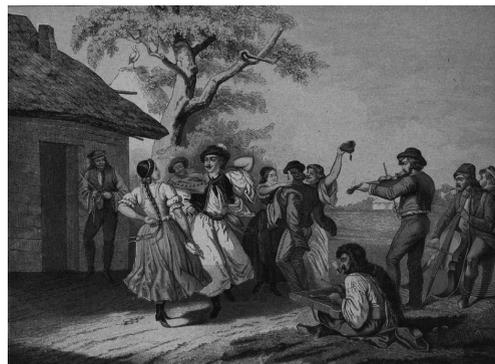
博し、楽譜がよく売れた。第1番から第6番がよく演奏されるが、実際には全21曲から成っている。

この曲集の誕生にはヴァイオリニストのエドゥアルド・レメーニ(1830-1898)とのかかわりが大きく影響している。ブラームスは1853年にレメーニの伴奏者として演奏旅行に出かけており、その際にロマの音楽について知ることとなった。ブラームスはこれをハンガリーの民族音楽だと思い、採譜し編曲したものを出版しようと思いつく。最初に6曲を1867年に出版しようとするがこれは失敗し、1869年に第10番までが出版され好評を得る。おそらくこれを受けて第11番以降が書かれ、1880年には第11番から21番までが出版されている。なお、ピアノ独奏やヴァイオリンとピアノのための二重奏版にオーケストラ版など様々な編曲が存在するが、ブラームス自身によるものは第1、3、10番の管弦楽編曲のみである。

この曲集には作品番号が付けられていないが、それは主題をロマの音楽の



ハンガリー舞曲第1番 連弾版冒頭(左)と管弦楽版冒頭



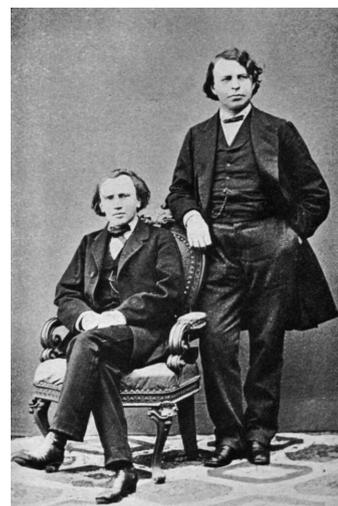
ハンガリーの民族舞踊

旋律からとっていることから、あくまでも“伝統音楽の編曲”であるとブラームス自身が考えてのことである(ただし、第7、11、14、16曲はブラームス自身によるものとされている)。そしてこれはブラームス自身を救う事にもなった。彼はのちにレメーニと仲違いしてしまったのだが、この曲集の人気ぶりを知ったレメーニは《ハンガリー舞曲集》が「盗作」だとブラームスに訴訟を起こしている。しかし「編曲」としていたことで難を逃れ、ブラームスが勝訴した。なお、レメーニとの仲違いはふたりでワイマールにフランツ・リスト(1811-1886)を尋ねた際、リストに対する態度などをめぐって起こったことであった。しかしこのことをきっかけに、当時の名ヴァイオリニストであり、ブラームスと深い友情を結んでいたヨーゼフ・ヨアヒム(1831-1907)からロベルト・シューマン(1810-1856)を紹介され、ブラームスの名前は広く世の中に知られていくこととなった。

全21曲はいずれも3部形式(あるいはそれ

に近いもの)で書かれており、哀愁と、どこか日本人にとっても懐かしさを覚えるような郷愁を帯びた旋律が印象的に響く。これらは19世紀のウィーンをはじめとするヨーロッパで大流行し、あまりの人氣に一時は禁止の法律ができるほどであった舞曲「チャルダッシュ」を編曲したものである。力強さと奔放さを持ったリズムが特徴的で、基本的には荘重なテンポによる「ラッサン」と急速な「プリスカ」の交替によって展開していく。

曲集の人氣ぶりは後の時代にも影響を及ぼしており、ブラームスが才能を見出し何かと支援したチェコの作曲家アントニン・ドヴォルザーク(1841-1904)は、出版社から《ハンガリー舞曲集》のような楽曲を書いてほしいという要望によって《スラヴ舞曲集》を作曲している。



ブラームスとヨアヒム(右)